

大聖堂のある街で

第9話 青い便箋に青いインクで



堀田耕介

病院の夜

頬を打つ冷たい雨に、ぼくは我に返った。ぼくたちは病院の屋上にいた。カスミはぼくをしつかりと抱きしめていた。いつの間にか、暴風雨になっていた。あちこちで物が飛ばされる音がする。ぼくたちはぐつしよりと濡れていた。髪が顔に張り付いていた。カスミの体温が暖かかった。

「カスミ。」

返事がない。

「カスミ！」

カスミの身体がぴくん、と動いた。うめき声を上げる。

「カスミ！大丈夫！」

ぼくはカスミの濡れた髪をかきあげて、額に手をつけた。カスミがうつすらと目を開けた。

「あ：ユキちゃん。」

「大丈夫？」

「ごめん、ちよつとふらふらする。」

そう言ってから急に目を開けた。

「すごい雨ね。」

「うん、中に入らないと。」

カスミは天に向かって手を上げた。

「いやなことは、何もかも、この嵐が流してくれるといいわね。」

ぼくは黙った。

「行こう！」

カスミは笑った。いつものカスミに戻っていた。

ぼくたちは病室に戻った。ベッドの隣のいすに座っ

たえっちゃんがお父さんの上に突っ伏していた。

「えっちゃん！」

ぼくが近寄ると、えっちゃんは冷たくなっていた。

「えっちゃん！」

「お父さんは？」

いつの間にか、お父さんの心電図が平らになっていた。

「えっちゃん、お父さん、死なないで！カスミちゃん、先生を呼んできて！」

カスミは二人の様子を見ながら落ち着いて言っ

た。

「大丈夫。今えっちゃんとお父さんは、どこか遠いところにいるのだけど、ユキちゃんがここにいることに気がついたから戻って来る。えっちゃんに触ってみて。」

ぼくはえっちゃんを起こそうとした。どくん。心臓は脈打っている。

「あ、えっちゃん、生きてる。」

カスミはお父さんの口元に顔を近づけて、
「大丈夫、呼吸が戻ってきたわ。」

と言った。

やがて医者が入ってきて処置を始めた。その時にはえっちゃんはまだぐったりしていたけど意識は戻っていて、ぼくの顔を見て弱々しく笑った。

「ごめん、私疲れちゃったみたい。」

「うん、休んだ方がいいよ。」

ぼくたちの様子に気がついて言った。

「あなたたち、ずぶぬれじゃない。着替えないとたいへんよ。」

「私は、制服を持ってるから大丈夫。ユキちゃんの

分の着替えはどうしよう。」

「部屋着なら売店で売ってるから、買ってきてあげるわ。」

えっちゃんはよろしながら立ち上がり、心配するぼくを制して部屋を出て行った。二人の女子高生はてきぱきと仕事を片付ける。

「すみません、着替えたいんですけどどこで着替えたらいいですか。」

「となりの病室は今空いてるから使っていいわよ。」
看護婦さんもてきぱきと対応する。

えっちゃんはずぐに部屋着を買ってきてくれた。隣の部屋から制服姿のカスミが出て来るとかわりにぼくが入って着替えた。服はぐっしよりと濡れていたけど、カスミの体温が残っていた。

ぼくが病室に戻ると医者はもう出て行くところ
で、

「もう大丈夫だから、ゆっくりしてなさい。」
と言った。看護婦がぼくの顔を見て、

「よかったわね。」
と微笑んだ。

「私、今日は帰る。」

えっちゃんが立ちあがった。えっちゃん表情は、いつもとは違っていた。

「私も帰るわ。」

カスミも立ち上がった。ぼくはついカスミの顔を見てしまった。

「大丈夫よ。」

カスミは微笑んだ。

「でも。」

「ユキちゃんがしつかりしなきゃ。」

えっちゃんが吹き出した。

「そうよね。」

二人の女子高生はおかしそうに笑っている。ぼくはちよつとムツとした。

「二人とも帰るって、どうするの？こんなにひどい雨なのに。」

「えっちゃんと同じ方向だから、大丈夫。まだ市電は動いているって、看護婦さん言ってたから。」

「じゃあね、お兄ちゃんのこと、よろしくね。」

えっちゃんはお父さんに駆け寄ってキスをして、黙

って部屋を出て行った。

「カスミちゃん……」

「大丈夫だよ。」

「うん。」

「また会えるから。」

「うん。」

「おやすみなさい。」

カスミはぼくのほっぺたに手をあてて、反対側のほっぺたにキスをした。

「きつとだよ。」

「うん。」

カスミは笑顔で部屋を出て行った。

嵐は、一晩中続いた。ぼくはお父さんの枕元でうつらうつらしながら、一晩中カスミのことを考えていた。

再会

三日間入院して、お父さんは退院した。しんちゃ

んのお父さんやりっちゃんのお父さん、それにお父さんの他の兄弟たちが手伝いに来てくれた。

えっちゃんは来なかった。それからお父さんは、仕事に行かなくなった。時計店の人がうちを訪ねてきてずいぶん説得したのだけど、お父さんは一番仲のいい職人に仕事を任せると言って、最後の仕上げもその人に任せ、晴れがましい式典にも出席せず、自分の名前は残さないでいいと言った。

お父さんはぼくの部屋にベッドを置いて、朝から晩までずっと大聖堂のトンがり屋根を見ていた。

えっちゃんはずっと来なくなった。どうしたんだろうとは思っただけど、おばあちゃんも何も言っ
てこなかったし、えっちゃんの気持ちはぼくも知っ
てしまったから、顔を出せないのかなと思っていた。
えっちゃんのお父さんへの気持ちを考えると、ぼく
は胸が苦しくなった。あの時感じたえっちゃんの気
持ち。ぼくがカスミを好きなように、えっちゃんはと
てもお父さんを愛している。でも愛してはいけな
いと思っている。それがどんなに辛いことなのか、ぼく
は想像するだけで苦しかった。

えっちゃんが来なくなつて、ぼくは自分で朝ごはんを作つて自分で食べ、学校が終わると帰つてきてお昼ご飯を作つてお父さんと一緒に食べた。午後には買い物をしたり掃除をしたり。今までお父さんやえっちゃんがやってくれたことを、ぼくは毎日一人でした。

お父さんが働かなくなつて、ぼくは自分がしつかりしないといけないと思った。4時に間に合うように市庁舎前に行つて、そこで新聞を売った。アイスクリームが売れなくなると、キリヤはホットドッグに

売るものを変えて、ぼくにときどきおごってくれた。暗くなつてくるとぼくたちは一緒に旧市街に帰つてきて、ぼくは夕食を作つてお父さんと食べた。

カスミにはなかなか会えなかった。一度手紙が来た。お父さんが元気になるまで、大変だけどがんばつて、と書いてあつた。ぼくはベッドに寝転がって、何度も手紙を読んだ。カスミの匂いがした。ぼくはカスミのことを思つて少しうつとりして、きつとまた会えるというカスミの言葉を思い出して、いつも急速に眠りに落ちた。

9月の終わりのある土曜日、ぼくはいつものように旧市街の市場で買い物をしていた。向こうから煙突掃除の親方と弟子が三人歩いてきて、ぼくは嬉しくなった。煙突掃除という職業は滅多に地上で会うことができないから、会えるのは幸運の前兆だと言われているんだ。ぼくは親方をお願いして、握手をしてもらった。親方はにこっとして、「いいことがあるよ」と言ってくれた。ぼくは何だか嬉しくなつて、買い物済ませていつものように新聞を売りに出かけた。

親方に握手してもらったおかげだろうか、ぼくは早めに新聞を売りきった。その日は夏の終わりのお祭の日。市庁舎前にもたくさんの人が出ていた。

新市街と旧市街の間の川の、河口近くの中州の上で、花火が打ち上げられると新聞を買った人が言っていた。お父さんにも見せたいな。でも、お父さんはそんな気持ちにならないかもしれない。ぼくは帰る前にどこかで一休みしようと思って、久しぶりに植物園に行った。

植物園にはあまり人はいなかった。お祭の中心

は河口の古い要塞前の広場なので、祭に行く人たちはみなそちらへ行ってしまう。ユリが真っ盛りだった。芝生の向こうにコスモスが揺れていた。夏と秋の間のきらめく夕方。ベンチでうとうとしていると、誰かに話しかけられた。

「きみはだれか探しとるのかね。」

「え？」

顔を上げると、いつかカスミやえっちゃんに話しかけていたおじさんだった。

「いい季節じゃのう。もう夏も終わりがけて、秋はまだ本当には来ていない。この時間には暑さもしのげる。」

「はい。」

「となりに座ってもいいかの。」

「どうぞ。」

ぼくはとなりの席を空けた。おじさんはぼくの隣に腰をかけた。

「誰でも人に言えることと言えないことがある。そうじゃろう。」

「はあ。」

相変わらず何を言ってるのか分からないおじさんだ。

「わたしには娘がいた。かわいい子でう。こんなに髪が長くて、いつもパパパってキャツキャとわたしになつてくれたものじゃ。海辺の町で、妻は眼医者をやつとつた。白い小さな病院の、日当たりのよい裏庭で、わたしは娘にありつたけの植物の名前を教えてやつたものじゃ。」

「はい。」

「だがわしは研究に専念しておったからの。忙しいときはろくに家にも帰らなかったんじゃ。そしたらある日、妻から三下り半を突き付けられての。わしは家を追い出されて、仕方なく植物園の研究室の一室に間借りするようになったんじゃ。」

「へえ。じゃあこの植物園がおじさんの家みたいなものですね。」

おじさんは笑った。

「そうじゃそうじゃ。お前はなかなか話がわかるのう。わしが話しかけても、みな変な顔をして話を途中

でやめてしまう。わしはその人にとって大事なことを言っておるのだが、みんななんだかよくわからない顔をするんじゃない。」

「ぼくも、おじさんの話は難しいと思います。」

ぼくは正直に言った。おじさんは笑った。

「何、大したことはないんじゃない。でも人間は、いつでも話しかけられる心の準備ができているわけじゃないからの。話しかけるときは人はもし、とかこんにちはは、とかちよつとお話しさせてください、とか言うじやろう。」

「はい。」

「あれはプロトコルと言ってな。これから話をしますよ、という準備をお互いするための言葉なんじゃ。じゃがわしはそれが壊れているというかめんどくさいというかうまく発せられなくての。だからいつもその人に一番必要な本題に入ってしまうんじゃ。だからなかなか会話が成立しなくての。お前は見込みがあるぞ若いの。」

「そうですか。」

「ところでお前は誰か探しておるんじゃない。」

「いえ、特に。」

「じれったいの。最近お前の周囲からいなくなった人がいるじやろう。」

「いなくなったって……なんかぼくの周りの人たちはほとんどいなくなってしまうんだもの。誰のことだかわからない。」

「おお、それは気の毒なことをした。」

しばらく話しているうちにまぶしい夕日が差してきた。点灯夫がガス灯に火を入れて、おじさんに会釈して向こうへ行った。ぼくは帰らなければと思

って立ち上がろうとした。すると、どこかで誰かの声がした。

「先生。」

「おお、こっちじゃ。」

淡いピンク色のワンピースを着た女の人近づいてきた。夕日に照らされたその人を見てぼくは驚いた。

「えっちゃん……」

えっちゃんは、驚いたような顔をしなかった。

「こんにちは。ああ、もうこんばんわね。ユキちゃん。」

元気だった？」

「元気だけど……」

ぼくはえっちゃんの顔を見た。えっちゃんは見違えるように元気になっていて、少しふっくらしていた。どうしてたの、というぼくの言葉をさえぎるように、えっちゃんは話し始めた。

「私、あれから学校をやめたの。」

「ええ？」

「学校やめて、お母さんには旅行に出るって言って、

海辺をさまよってたの。」

「どういうこと？」

「だって、生きてても仕方ないなっと思って。」

「えっちゃん……」

「大丈夫よ、こうして生きてるんだから。」

えっちゃんは笑った。

「どうして……」

「だって、お兄ちゃんと一緒にいられなくなるくらいなら、死んだって同じだって思ったのよ。お兄ちゃんといられなくなるなら、この街にいる意味もないし。」

だから学校もやめちゃったのよ。」

えっちゃんは笑みを浮かべて、それでも下を向いて言った。

「それで私、一人で砂浜を歩いていたの。どうしたらいいか分からなくて。私はね、いやなことがあるとすぐ海に行くの。ユキちゃんがエリオットの丘に登るみたいだね。」

波の音が聞こえた気がした。

「晴れた日の海じゃなくて、曇った日の海。昼の海じゃなくて、夜の海。浜辺にじっとしてると、陸から

海に風が吹いて、ふわっと海に歩いて行きたくなる。海の中に漁船の光が見えて、まるで私を誘うようだった。私の中のぽっかりと空いた黒い空間と、真つ黒な海がとても仲がよいような気がした。あの光が親切に、私のいく先を示していてくれる。私はふらつと海に歩き出しそうになった。そしたら、浜辺の遠いところに火が見えたの。こんなところで誰が何をしてるんだろうと思って、歩いて行ったら、先生がいたの。それで私、先生に話しかけたのよ。」

ぼくはおじさんの方を見た。

「わしは海辺で、海藻を集めておった。夏は海藻に興味がわくからの。浜辺で火を焚いて、海草を海辺に並べてその整体を調べておったんじや。そうしたらこの子の方から話しかけてきたんじや。」

「ふうん」

「わしはプロトコルが使えるが、向こうから話しかけてくればちゃんと話せるからの。」

「最初は先生、夢中になって海藻の話をしていた。私、何だかよく分からなかったけど、でも言葉の中にその焚き火と同じ暖かさを感じた。それで私、

先生に自分のことを話し始めたのよ。先生はずつと私の話を聞いてくれた。」

「そうじゃそうじゃ。よく働いてくれたからの。三日三晩、浜辺で。夜は火を焚いてその周りで、昼は一緒に海藻を集めながらの。」

「先生は何でも私の話を聞いてくれた。どんなつまらないことでも、ちゃんとそのことについて考えてくれた。私の心の中のいろいろなことが一つ一つ正され、癒されていく感じがした。そうしたら私、だんだん元気が出てきたの。」

ぼくはえっちゃんの顔を見た。えっちゃんは曇りのない微笑みを浮かべていた。

「先生が街に帰る日、えっこはどこかへ行くのかい、って聞いた。私は首を振った。そうしたら先生、私と一緒に来るかいつて聞いた。私はうなずいた。だから私、この街に帰ってきて、先生と一緒にこの植物園に住み込んでいるの。」

「そうだったんだ。」

ぼくもだんだん、えっちゃんの心の中がわかってきて、嬉しくなってきた。

「私、市庁舎の広場で新聞を売ってるユキちゃんのこと、何度も見かけたのよ。でも、話しかけるの、ちよつと怖くて。捨てたはずの思いが帰ってきたらどうしようって思ったのかもしれない。でもこうして話ができるよかったわ。お父さん元気？」

ぼくは黙った。

「そう、元気じゃないのね。」

えっちゃんはうつむいた。

「うん：毎日、ぼうつとして過ごしてる。市庁舎の時計塔の修理もあれから行かなくなっちゃって、完

成式典にも出なかった。あんなに楽しみにしてたのに。」

「そう……」

「お父さんは探しとるんじや。」

「お父さんが？でもずっと家にこもりつきりで、ほとんど一日中横になってるんだよ。」

「お父さんは探しとるんじやよ。心の中で。本当に自分が必要で、本当に自分を必要とする人のことを。」

ぼくは尋ねた。

「お母さんを？」

「そうじゃ。」

「でも、お母さん、どこにいるのか……」

「ふふ。」

えっちゃんが哀しそうな、悔しそうな、でも笑ったような、泣いたような、複雑なくしゃくしゃとした顔をして言った。

「私、まりちゃんのいる場所、知ってるの。」

「えっ？」

「まりちゃん、一度自分のお母さんのところに帰っ

ただ、本当に病気になってしまって、海のそばの療養所に移ったのよ。一度手紙が来てたんだけど、その時私しかいなかったから、その手紙を隠しちゃったの。」

「えっちゃん！」

「ごめんなさい。でもそうしたらお兄ちゃんもユキちゃんも、まりちゃんのことを忘れてくれるんじゃないかって。そうしたらお兄ちゃんとユキちゃんと私と三人で、何事もなかったかのように暮らしていけるんじゃないかって思ったの。」

「えっちゃん…」

「ごめんなさい。恐くて、今までそのこと言えなかった。」

えっちゃんは小さな布のバッグから手紙を取り出して、ぼくに渡した。青い封筒に青いインクで、懐かしいお母さんの筆跡がお父さんとぼくの名前を記していた。

「お父さん、ユキちゃん、元気ですか。」

私は今、海辺の療養所に来ています。おばあちゃ

んも体を壊して、私と一緒に療養所に入りました。二人とも、何とかかんとかやっています。午前中は気分がいいのだけど、午後は気持ちがあふさいで、海で遊ぶ子どもたちを見ると、ユキちゃんのことを思い出します。ユキちゃんは妹をほしがってたよね。ユキちゃんに、妹を上げられるはずだったのに、残念ながらをってしまったわ。療養所には私と同じように体を壊した絵描きさんが入っていて、私の話を聞いて、小さな女の子の絵を描いてくれた。私はその絵を大事にして、枕元に飾っています。お父さん、

ユキちゃん、落ち着いたら療養所にも遊びに来てね。
まりより。」

そこには二年前の夏の日付と、療養所の住所が記されていた。そこは新市街の端にある遠くへ伸びる鉄道の駅から列車に乗って、数時間のところにある、美しい風景で知られた海岸だった。

「お母さん……」

「探し物は見つかったかの？」

「うん。でも……」

「まだあるんじゃない？」

「うん……」

「欲張ったらいかん。一度に全部、欲しいものが手に入るように、この世の中は出来てはいないんじゃない。」

「うん……」

「そんなことないよ、先生。」

えっちゃんが先生に抱きついた。

「おお、びっくりした。わしは他人のことは驚かせてしまいが、わしを驚かせるのはえつこくらいじゃのう。」

「えっちゃん。」

ぼくもえっちゃんに驚いた。それはまるで、お父さんに抱きついたときのえっちゃんと同じだったからだ。

「私、欲しいもの、すべて手に入ったよ。」

「え？」

「私ね、お兄ちゃんのこと、もうすっかり諦められた。私には先生がいる。」

ぼくは目がぱちくりした。えっちゃんは急に恥ずかしそうな顔になった。

「どうしたの？」

「あのね、ユキちゃんに従兄弟ができるの。」

「ええ？」

ぼくと先生は一緒に声を上げた。

「ぼくのいところ？ってことは……」

「なんじゃ、そんなこと、わしに黙っておったのか。」

「だって、驚かせようと思って。」

「ううん。驚きじゃ。わしに二人目の娘ができるのか。」

「娘ってわからないでしょ。」

「いやいや、わしの子じゃから娘に決まっておる。わしに似て、かわいい子が生まれるに決まっておる！」
先生は興奮して急にベンチの上に立ち上がった。

「こうしちやおれん。お祝いじゃ。わしは行くぞ。少年よ、きつとお前の願いもかなうぞ！さらばじゃ！」

先生はあわてて植物園の中に走って行った。えっちゃんも幸せそうな顔で先生を見送った。あたりはすっかり暗くなつて、ぼくたちは街灯の光の中にいた。

「えっちゃん。」

ぼくはちよつとためらった。

「おめでとうって言っていていいのかな。」

「おめでとうって言って。」

「でもなんか話が急で……」

「ごめんね、いつも私、突っ走っちゃって。でもユキちゃん、あなたが私の子どもだったらいいなってずっと思ってた。私、お母さんになりたかったの。でもなれないって思ってた。だから、今、とても幸せなの。」

「そうなんだ……」

ぼくはどういうふうに思ったらいいいのか分からなかったのだけど、きつといいことなんだと思った。そう思うと、嬉しくなってきた。

「おめでとう、えっちゃん。」

「ありがとう、ユキちゃん。」

「おばあちゃんは知ってるの？」

「ううん、これから。きつと大騒動ね。でも分かってくれると思う。私のこと、結局一番よく分かっているから。」

「そうだね。」

ぼくはうなずいた。

「ああ、まだどきどきしてる。」

「ユキちゃん、元気でね。」

「うん、ぼくお父さんと、お母さんに会いに行くよ。」

「私、本当に、あなたたちには申し訳ないことをしたと思っているの。ごめんなさい。」

えっちゃんは頭を下げた。

「ううん。ぼく、えっちゃんの気持ちだってわかるもん。好きな人がいたら、自分のお兄ちゃんだって譲

れなくなっちゃうもんね。」

「うん、私、先生に言ったの。それだけは譲れないって。私、先生の前で泣いた。そうしたら先生、美し
いって言った。私はえっと思っ
て顔を上げたら、先生、火の前で
テングサを広げながら言うのよ。
あなたがそうやって思いつめて
行くのは美しい。その向こうに
死しかないと思いつめるのは美
しい。けれども、人の生き方は
一つしかないわけじゃない。人
の美しさは一つしかないわけじ
ゃないって。なかなか気がつ
かないかもしれないけど、テ
ングサにはテングサの美

しさがある。コスモスにコスモスの美しさがあるように。一つの美しさを得るために、他の美しさを犠牲にしなければならぬこともある。でもそれが、本当に自分の欲しかった唯一つの美しさなのか、考えてごらんって。そのこともあるし、あのこともあるって考えられるのも、一つの生き方だよって。それで私、はっとした。私、お兄ちゃんが一番好きだったけど、でも好きなものはおにいちゃんだけじゃなかった。きらめくもの、揺れるもの、みんな好きだった。それで私、それを教えてくれた人と生きようと思った。

たの。」

ぼくはえっちゃんがまぶしく見えた。えっちゃんはちよつと恥ずかしそうな顔になった。

「それにね、私先生の横顔が好きなの。いつも真剣な顔をして、本気で植物を観察している。私の話を聞くとときも、いつも本気。お兄ちゃんと話していると、やさしい顔で聞いてくれるんだけど、ふつとつまらなそうな顔をするときがあつて、私、すごくいたたまれなくなるときがあつたの。お兄ちゃんに喜んでもらうにはどんな話をしたらいいんだろうって

いつも考えてた。だからお兄ちゃんのことばかり考えていたのかもしれないな。でも先生はいつも本気。いつも本気で私の言うことを聞いてくれる。私の気が付かなかったことまで聞いてくれるから、何か私、先生の言葉のゆりかごの中にいるような気持ちになっっているの。」

嬉しそうに話すえっちゃんの声を聞いて、ぼくはよかった、と思った。

「それにしてもえっちゃん、おじさんばかりだね。」
えっちゃんは大笑いした。

「あつはっは。何言ってるのよユキちゃん。」

そしてちよつと意地悪そうな顔をして言った。

「あなたのお父さんがいけないんだからね。」

ぼくはどきつとした。急に植物園の向こうが明るくなって、ドン、という音が聞こえた。ぼくはそっちに顔をそらして言った。

「そうだ、今日は花火の日だったんだ。」

えっちゃんは何くわれない顔をして言う。

「ほんと、おじさんばかり。ユキちゃんみたいなかわいい子の方がよかったな。カスミちゃんずるいんだか

ら。」

ぼくはどんな顔をしていいのか分からなかった。

「もう、いいかげんにしてよ、えっちゃん。」

「ごめんごめん。」

またあたりはぱあっと明るくなった。大輪の花火に、えっちゃんの顔が照らし出された。えっちゃんの表情はまた変わっていた。

「ごめんね。私、本当に悪いことをしたと思ってる。でもわかってくれて、嬉しいのも本当なの。お父さん、まりちゃんと仲直りできるように、私も祈って

るね。」

「ありがとう。大丈夫だよ、きっと。」

ぼくは手を振って、えっちゃんと別れた。えっちゃん
が幸せになる。ぼくはそれが嬉しかった。そして、
カスミに会いたい、と思った。エリオットの丘の方向
の空に、流れ星が流れた。

大聖堂のある街で 第9話 青い便箋に青いインクで

<http://p.booklog.jp/book/45704>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45704>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45704>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.